

ま・な・び 記録帳

『萩の夏みかんについて』

◆夏みかんの魅力に迫る

「夏みかんと土塀」という景色を気に入って、旅行に来れば必ずその景観を求めては写真に収めてきました。それは萩に越してから変わらなく、折に触れて目を楽しませてもらっています。今回は、萩博物館で開催された企画展「萩の夏みかん物語り」の展示から、夏みかんの魅力に迫っていくことにします。

◆夏みかんとは？

はじめに夏みかんの学名は、シトラス・ナツダイダイ・ハヤタ (Citrus Natsudaiddai Hayata) といいます。これは、大正八年(一九一九)に早田文蔵博士が新種として発表したことに由来します。…ということは、日本原産種という扱いになるわけですが、このストーリーが面白いのです。夏みかんの原樹は、山口県長門市大日比(青海島)の西本家にあります。江戸時代中

期の一八世紀に、近くの海岸に流れ着いた見たことのないミカンの種子をまいて育てたものといわれています。それはアジアのどこが原産ということになりそうですが、はっきりしないために日本の名称が学名になったのです。なんだか不思議ですね。ちなみにこの夏みかん原樹は、昭和二年(一九二七)四月八日に国指定史跡及び天然記念物に指定されています。



(夏みかん原樹)

◆夏みかんを広めた人物

明治時代の初期、萩藩の士族たちは生活に困窮していました。それは、江戸時代末の藩庁の山口移転に続き、明治維新・廃藩置県によって、萩は政治・経済の中心ではなくなってしまう、藩の重臣たちはこの地を離れ、また萩に残った士族たちは、禄(給料)

を得られなくなってしまうからなのです。



甘い香りを漂わせる白い花

こうした状況を見かねて、明治九年(一八七六)、長州藩の役人小幡高政(おばたたかまさ)が、生活に困っている士族救済のために「耐久社」という団体を設立し、夏みかんの苗木を大量に生産して栽培を推奨します。彼は、もともと武家屋敷地にも植えられていて、あまり手をかけなくても実る夏みかんを、主の居なくなった広い武家屋敷地に植えて、大々的に栽培しようと試みたのでした。

全国で初めて、夏みかん栽培に取り組んだ小幡高政(文化一四年(一八一七)〜明治三九(一九〇六))は、「夏みかん栽培の父」といわれます。彼は、周囲の冷ややかなまなざしを感じながらも、自らも率先して邸宅(現在の田中義一別邸)周りの屋敷地(現在のかんきつ公園)にも夏みかんを植えていきました。

◆黄金の果実・夏みかん

栽培から十年程たった頃には、旧萩城下の空き地のほとんどに夏みかんが植えられ、出荷量も相当なものとなりました。また、夏みかんはとても高値で取引され、夏みかん五個で米一升分の価格であったそうです。なんと、明治三〇〜四〇年代(今から一〇〇〜一一〇年前)には、当時の萩町の年間予算の八倍もの生産額を誇っていました。

＊ ＊

ところが、夏みかん栽培は一九七〇年頃を境に衰退していきます。その頃までは、萩の夏みかんは鉄道を使って遠くは北海道や東北まで全国各地へ出荷されていましたが、ミカンの仲間が出回るようになって、次第に生産が減っていくこととなったのです。



城下町のあちこちで見かける夏みかんと土塀の風景

◆夏みかんあつての萩

夏みかん栽培が衰退してしまつたのは残念ですが、時代の流れもあり、仕方のないことだと思っています。

しかし、明治期から昭和頃までの間、夏みかんが高値で取引され続けたことで、夏みかんの木が植えられた畑は、風から守るための土塀や長屋などとともに維持・管理されてきました。このため、武家屋敷地の区画も大きく変わることがなく、「江戸時代の地図が使えるまち」、「土塀と夏みかんのまち」という景観の維持形成に大きな役割を果たしたといえます。

このように、萩の経済を支え、景観を形成してきた功績を知ると、「夏みかんといえば萩」というよりは「夏みかんあつての萩」と述べるべきかと思えてくるものです。



萩博物館はとても楽しいのにゃ！(萩にゃん。)